

「蟻はキリギリスと同じ食卓に着けるか」(要旨)

聖書箇所：マタイ9:9-17

『蟻とキリギリス』；太陽が照りつける夏の間働き続けた蟻とバイオリンを弾き歌い続けたキリギリス。寒い冬がやって来て…。

よく働いた蟻が主人に食卓に招かれ赴くと、そこには既に、遊んでばかりのキリギリスが席についていて…。この状況をどう思いますか？

【1】なぜ断食をしないのか

「なぜあなたの弟子たちは断食をしないのですか」(マタイ9:14)

洗礼者ヨハネの弟子たちがイエスにした質問です。当時の宗教指導者パリサイ人とヨハネはたびたび断食をしていました。イエスが取税人マタイや罪人たちと同じ食卓に着いたのを目にして、イエスに対する苛立ちと不満をぶつけました。彼らは、自分たちの不満の原因はイエスにあると思いました。本当にそうだったのでしょうか？

本来断食は罪の悔い改めの信仰表現で、神に対してなされるものでした。自らが悔い改めに迫られている場合、周囲の動向を気にすることなどできないはずです。イエスの時代には、断食が自分の善行を周囲に知らしめる行為と化していました(参考:ルカ18:9-14)

彼らのイエスに対する不満は、「放蕩息子のたとえ」に登場する兄息子の父親に対する姿と重なります(ルカ15:25-28)。

【2】神に愛され、神を愛するという事

質問に対するイエスの答えはシンプルでした。婚礼に招かれた客が喪服で参列しないように、「花婿と一緒にいる間、悲しむことができるでしょうか」(15)というものでした。

旧約聖書の文脈では「花婿」はイスラエルの神を象徴しました。神は人を人格的に愛するお方です。神は人を、神との人格的な結びつきの中で充足し生きる者として創られました。それ故、人は神に愛されていると知

ることで真に満ち足りるのです。神から離れて生きる時、たましいの飢え渴きを経験します。別の神々すなわち偶像によってはその欠乏感を満たすことができないのです。

パリサイ人やヨハネの弟子たちも「花婿」に受け入れてもらうための努力を惜しみませんでした。ところが、イエスのご自分を「花婿」と言われたのです。更にその「花婿」は、神の愛から遠いとされた取税人や罪人たちと同じ食卓に着いたのです。

▷「花婿」が「花嫁」に求めることはなんのでしょうか？「花嫁」が「花婿」のために犠牲を払い努力を惜しまず成果をあげることでしょうか？いえ、「花婿」の愛を感謝して受け入れることです。

【3】新しいぶどう酒は新しい皮袋に

神に受け入れられるべく努力を惜しまずに生きていたパリサイ人やヨハネの弟子たちは、取税人や罪人たちを受け入れるイエスに苛立ち不満を抱きました。彼らは自分たちのこれまでの生き方(「古い衣」「古い皮袋」)をしっかりと握りしめ、戸口の外に立ち、眺めていました。あの取税人や罪人たちと同じ席に着くことはできないと。しかしイエスの食卓に着きたいと願うのであれば、「どうしたら、あなたと一緒に食事ができますか」とイエスに尋ねればよかったのです。イエスは喜んでその方法を教えて下さいます。

▷先にあなたを食卓に招いておられるのはイエス・キリストなのでから。

「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。」(黙示録3:20)

